

[教育方法一般]

生徒の学力実態を分析し、一人一人の学力向上を目指した取組  
－職員研修を通して全職員が各教科の取組を相互理解し、目標を共有する取組の成果－

荏澤 均\*

1 研究の動機及び理由

(1) 問題の所在 一当校の平成16年度学力実態からの危機感一

平成16年度、当校の学力は旧豊栄市内の中学校中、非常に低い状態であり、学力の向上は、当校に課せられた大きな使命の一つであった。また、学力向上は単に、基礎学力を身に付けさせることだけではなく、生徒一人一人が自らの力で考え、判断する力を養うことにおいても大切なことである。中学生の今を生きるために必要なものであると同時に、自分の将来を見通したときに、己に自信をもてるか、逆に不安になってしまうかという大きな意味も持っている。さらに、この将来への不安が、様々な生徒指導上の問題を引き起こしている原因の一つであると考えたときに、学力向上のもつ意味はさらに大きい。また、学力不足からくる生徒指導上の問題「分からないから授業に集中できない。それによって他の問題行動へ気持ちが向いてしまう」など、悪循環が見られ、当校は、生徒指導上の問題を多く抱えていた。一例として、朝学活のざわつき、授業中の立ち歩きなども16年度には、時折見られた。また、心理学的に、自我関与の及ぶ範囲のすべてが〈私〉であるという考え方もある。〈私〉の世界を有意義により大きく構成し、よりよく生きていくためには、中学生のこの時期に、自信に満たされて大きく学ぶことが大切であると考ええる。

表1 当校の全国標準学力検査の偏差値（15年度・16年度）

学力偏差値（2年生）	国語	社会	数学	理科	英語	学力偏差値（3年生）	国語	社会	数学	理科	英語
15年度	50.0	47.8	48.5	48.4	48.9	15年度	48.7	46.4	46.0	49.8	49.1
16年度	48.4	49.9	45.0	46.0	48.5	16年度	50.0	48.0	47.1	48.1	49.9

表2 当校の全県学力調査の結果（16年度）

正答率（1年生）	国語	社会	数学	理科	英語	正答率（2年生）	国語	社会	数学	理科	英語
自校	74.7	67	62	56.5	63.4	自校	65.8	61.9	71.8	57.2	65.4
県全体	76.7	71.7	69.6	61.1	65.6	県全体	70	64.3	74.8	67.7	68.7
自校と県の差	－2	－4.7	－7.6	－4.6	－2.2	自校と県の差	－4.2	－2.4	－3	－10.5	－3.3

上記の表のように、平成16年度の標準学力検査では、本校の学力実態は旧豊栄市内で全教科とも最下位かそれに近い状態であった。それ以前の検査でも同様の年がほとんどであった。また、平成17年1月（平成16年度）に実施された全県学力調査では、2学年（1年生と2年生）の全教科で当校の数値が県平均を大きく下回っていた。

(2) 職員の学力向上への意識改善

中学校では、教科の専門性があるので、自分の担当する教科以外の取組はよく分からなくとも、その分、自分の担当する教科に重点的に取り組めばよいという意識が教員にある。これを専門性という枠に縛られることなく、互いの良さを研修し合うことに向けさせることができれば、スキルと意識の両方を向上させることができると考えた。そのためには、問題点を徹底的に分析することで、学力向上における共通の方向を見い出すことが必要である。一つの授業を全職員が参観し、それを全職員で検討できるようにするなど、職員研修の改善の必要性が生じた。

\* 新潟市立木崎中学校

### (3) 県教育委員会の動向と指針から感じた必要感

当校では、長期休業の前に、学校生活満足度調査を行っている。そこでは、生徒は、定期テストや受験時はもちろん、普段の学習においても、自信のなさを示していた。また、友人との関係が良好な生徒であっても、学校生活に楽しみをもてないという気持ちをもっているという実態が判明した。この傾向は成績下位の生徒に強く見られ、心の悩みにも結びついているという調査結果が出た。

また、県教育委員会の学校教育の重点では、「確かな学力の向上」への取組が毎年求められている。本年6月に全県で行われた「学力向上推進フォーラム2006」でも「分かる授業づくりの一層の努力」が求められている。

これらのことから、次のような仮説を立て、研究を推進した。

## 2 研究の仮説

### (1) 研究仮説と設定の理由

子どもたちの学力が低下している要因の一つに、子どもたち自身に、学びを確立していく意欲が低下していることがあげられる。しかし、これは子どもたち本来の姿ではない。子どもたちは、常に自らを向上させたいという願いをもち、そのために努力したいという意欲をもっているものである。子どもたち本来の姿と、この現実の姿との乖離は、「学習がよく分からない」ということに起因していると考えた。

そこで当校では、「分かる授業づくり」を進めると共に、基礎・基本を一人一人に徹底して身に付けさせることを、各教科で取り組むこととした。この両面から生徒の学力を保障していくことで、学習が分かり、学力が身に付いていくことの手応えを感じさせることができると考えた。さらに、こうした取組を重ねることで、子どもたちに、将来への自信をもたせ、かけがえのない〈私〉をつくることにつながると考えた。

そこで、当校では、次のような仮説を立てた。

- ・適宜各教科の進捗状況や指導状況（生徒のつまずき等）を調査し、学習指導部で把握する。
- ・評価方法を改善し、分かりやすく、生徒・保護者から信頼されるものとする。
- ・授業改善を図り、一人一人に応じた指導方法を工夫する。

以上を継続・実施していけば学力は向上する。

### (2) 本校の取組の工夫

本研究仮説は、学力向上への取組としては当たり前のことである。しかし、一般的ではあるが、これを恒常的に推進し、確実な結果を出すのはなかなか難しい。そこで、その推進のために、当校では次の点を工夫した。

①平成16年12月末、各教科（国語、社会、数学、理科、英語）の教科主任に教科部会の開催を指示した。また、下記の内容を校長に進言し、実施した。

- (ア) 12月末までの進捗と年間指導計画とのズレを洗い出すこと。
- (イ) 残りの単元と必要時間を洗い出すこと。
- (ウ) 生徒の実態から特に必要である指導内容をあげること。
- (エ) 1～3月までの指導可能時数と必要時数を計算すること。

またその際に、教務主任から時数の変更等の配慮をしてもらった。特別時間割や職員の出張等で自習が発生しそうな時は、可能な限り授業の入れ替えをして、極力自習をさせず、教科の授業を行った。

(ア)に関し、12月末までのいずれの教科担任も授業の進捗状況はむしろ遅れ気味で、その原因は丁寧に時間をかけて指導をしていることにあることが分かった。

②職員研修で全職員が問題と目的を共有する。

- ・これまで各教科の取組は、その教科のみで検討してきたものを、全職員で検討し、目的の共有化を図る。

③評価の実際を詳細に通知し、保護者の理解と協力を得る。

- ・通知表を全面的に改訂し、学習指導や評価に対する保護者の関心を高め、保護者の意見を職員の実践に生かす。

④研究授業の参観・検討会を全職員で行い、「分かる授業」への改善に役立てる。

- ・生徒の学びの状態、授業が分かる様子を的確に確認するため「効果的な参観の仕方」を研修してから授業参観と協議会を行った。



写真1 〈授業研究（英語）〉

これらの取組を柱として、次のように研究を推進した。

### 3 研究の詳細

#### (1) グランドデザイン

学力向上は学校全体の統一的な取組が欠かせない。下記に示したグランドデザインに学力向上の取組を学校の目標系列の内に反映させた。

平成18年度 新潟市立木崎中学校の学習指導のグランドデザイン

#### 木崎中学校 教育目標

自ら学び 自ら考え 生き方を求める生徒 **〈スローガン〉** 自分づくり 仲間づくり 夢づくり

(1年生) ・基本的な生活と学習の習慣を身につけ、集団の向上を目指す生徒

各学年の重点目標 (2年生) ・積極的に学習に取り組み、互いを尊重し、支え合う生徒

(3年生) ・計画的に学習を進め、将来の夢と希望に向かって互いに努力する生徒

#### 今年度の重点課題

##### ①学力の向上 中心となる教育活動と取組

##### ○教科

##### 基礎学力の向上を目指す

・全教科で基礎学力の獲得を目指す学習活動を実施する。(分かる授業、補充学習等)

##### 個に応じた学習指導を行う

・英語、数学で少人数指導や習熟度別の授業を実施する。

##### ○総合的な学習の時間

・問題の解決策を思考し、学習を進める力を育成する。

・課題意識をもった体験的な学習を実施する。

#### 目標とする成果

(評価方法：「学校生活満足度調査」「NRT」「単元別確認テスト」「漢字テスト」「計算力テスト」)

##### ○教科

・各教科の授業内容を肯定的に捉え、5教科の単元別確認テストや漢字・計算力テスト等で80%以上の生徒が合格する。補習等の実施で全員合格を目指す。

・標準学力検査(NRT)で、標準偏差値が前年度を上回る。

##### ○総合的な学習の時間

・学習する内容に意義を感じ、積極的に課題に取り組む生徒が80%以上となる。

#### 保護者・地域との連携

・家庭学習の取組に対する支援。

・総合的な学習の時間など、体験的な学習での施設の利用や学習への支援。

#### (2) 職員研修

職員研修で教科部員及び全職員で検討、協議した結果、基礎・基本の徹底と分かる授業づくりの手立てを次のように設定し、実施した。

- ①各教科で次のような取組を実施し、基礎・基本の確実な定着を図った。取組の実施は学級の時間や昼休み、放課後等を活用し、事後学習を含めて学級及び全校体制で取り組んだ。

【国語科】 全校漢字テストを年4回実施し、合格点に満たない生徒には、合格するまで再テストを受けさせる。その結果、漢字語句の知識の定着度が突出して上がった。また、朝読書を行い、集中して静かに学習(読書)に取り組むところから1日をスタートさせる。さらに、全校読書を年3回行って、豊かな情操を養い、感想文記入を通して読解力の向上を図る。その結果、読書に親しみ、積極的に図書館を利用する生徒が増えた。

【数学科】 全校計算テストを年4回実施し、合格点に満たない生徒には、放課後学習会に参加させる。そこで再テストを実施し、合格できるようになるまで個別指導を行う。また、全校計算検定を年2回実施し、自己の学力を把握すると共に、上位の級にチャレンジすることを通して、自己を伸ばそうとする姿勢を育む。その結果、成績中位の生徒の実力が上がってきた。やればできるという体験を通して学習意欲も向上してきた。どうしても自

分の実力で合格することができない成績下位の生徒は、学習しなければ学力が身につかないことを自覚することができた。また、教師と一緒に数学の問題についてじっくりと話し合うことができ、「問題を解く」ことへの意識が高まった。

【英語科】 英単語テストや単元テストを定期テスト前に実施し、合格点に満たない生徒には、別紙学習課題を与えたり、個別指導を行ったりする。ALTと一対一でスピーキングテストを実施し、必ず会話するという姿勢を育む。その結果、ALTとのスピーキングテストでは、緊張するものの、英会話が通じるという楽しみを味わい、次はこんな風に伝えたいという意欲を持つなど、学習に対する必要感を高めることができた。

社会科、理科についても単元テストを実施し、取組状況の把握を行った。その把握を基にして個別指導を行い、定期テストでの向上を支援した。

②教科主任会を定期的に実施し、定期テスト及び単元テストにおける各教科の学習の定着状況を把握する。定着状況が向上しない単元については、学習会を実施し、個別学習に対応する。このことを保護者、地域にグランドデザインを通して、公表した。また、学校だよりを通して、その取組状況と成果を報告した。

③英語、数学の少人数学習で、よりきめ細かな習熟度別学習が実施できるよう、その課題を職員研修のテーマとして、全員で協議した。

④3学年の選択教科の英語、数学で習熟度別に少人数の授業を新たに6コース開設した。

⑤長期休業中に補講学習を実施し、休み明けに確認テストを行って、学習の定着状況を把握した。

### (3) 通知表の改訂

①改訂の方針 当校では、平成16年度に次のことを方針として通知表を全面的に改訂した。

- (ア) 生徒自身が自己の学習や活動を詳しく振り返り、それらを通して付いた力や、これから付けていきたい力に自ら気付かせる。
- (イ) 生徒が自己の変容や向上を再確認し、自己の取組の成果を次期の学習や活動への意欲につなげる。
- (ウ) 生徒の学習成果や活動の実際を保護者により詳しく丁寧に伝え、学習指導や評価に対する関心を高める。
- (エ) 事後アンケートから、保護者の学力向上に対する考え方を把握して、より家庭と連携した学習指導ができるようにする。また、学校や職員に対する意見を今後の学習指導に生かしていく。

②具体的な体裁は下記の通りである。

- (ア) 表紙 「校名」「題」「教育目標」「重点目標」「スローガン」「校長名」「担任名」「学級写真」
- (イ) 表紙裏 「観点別評価の解説」
- (ウ) 必修教科の記録 「評価の観点」「ABC」「5段階」
- (エ) 選択教科の記録 「評価の観点」「ABC」「3段階(ABC)」
- (オ) 総合的な学習の時間の記録 (学期ごと)
  - a) 活動内容の振り返り (生徒の自己評価)
  - b) 身に付いた力の確認 (生徒の自己評価)
  - c) 評価 (教師…要録や調査書記入を見通し、生徒に身についた力を的確に把握した評価)
- (カ) 定期テストの記録 (4回のテストごと) 「素点」「度数分布グラフ」
- (キ) 定期テストの総括 (各教科担任によるテスト分析)
- (ク) 「行動の記録」「活動の記録」「出席状況」「所見 (担任から)」「家庭から (保護者記入)」

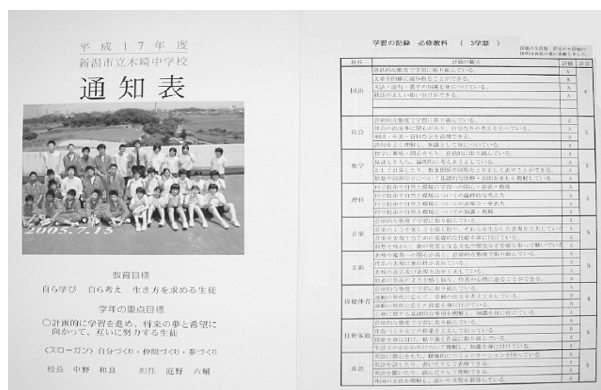


写真2 (ア)表紙 (ウ)必修教科の評価

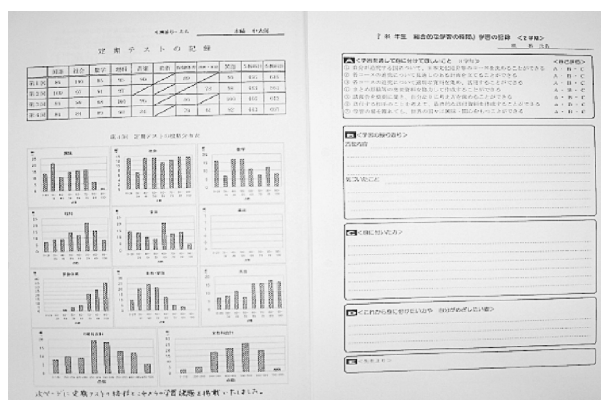


写真3 (カ)定期テストの結果 (オ)総合の記録と評価

### ③保護者の評価

#### 【通知表 保護者アンケート（提出率全保護者の77%）平成16年7～8月実施】

新しい通知表のアンケートを保護者に実施し、その評価を集約した。結果は右下のグラフの通りである。内容については86.2%，体裁については95.3%の保護者が「よい」，「大体よい」ととらえていることが分かった。

下記はその感想の一例である。

- よく分析されていて、細かく分かって家庭学習の参考になって良い。
- 総合の時間は、（イベント的な活動以外）何をやっているのかさっぱり分からなかったが、この通知表でとてもよく分かった。人前でいろいろと発表していることも分かってうれしかった。
- 個人の成績は前の通知表と同様だけど、定期テストの記録などが一緒にとじられているので、親としてより良く子どもの成績を把握できるのでよい。
- 選択教科のことや、総合、定期テストの結果など、ひと目で分かる様になっていてとても分かりやすくて良い。
- 評価の観点が細かくされているので、とても分かりやすい。
- 学習の記録も保存される、確実に親の目に触れるということで、子どもが真剣に記入できているようで良いと思う。
- 総合の学習の記録やテストの記録の表などがあり、前に配布されたプリントを出さなくても、すぐに見られたし、総合の学習内容が分かってよかった。
- 改訂されたと聞き、以前より関心を持つことができました。
- 今までより詳しく具体的になり、分かり易い（子供達の自己評価も）。

このアンケートと感想の分析から、保護者は概ね改訂を「良」と受け止めていることが分かった。特に「学習の内容や学習している様子がよく分かってよい」「自分の子どもが、何ができるようになったかがよく分かってありがたい」という感想が多くあった。このことから、新しい通知表によって、保護者が学校の学習活動に、新たな関心をもち始めたことが分かった。

また、下記のように改訂の取組そのものに対する意見もあった。

- 多角的、積極的な取り組みとして興味深い。
- 先生方の前向きな姿が表れて、親としては嬉しい。

このことから、改訂するという学校の取組の姿勢から、関心と理解を深めた保護者もいることが分かった。これらの意見は、学力向上に取り組む全職員にとって励みとなった。また、職員の評価は下記の通りである。

### ④職員の評価

表3 通知表職員アンケート（提出率75%）平成16年9月実施

	適切	大体良い	一考を要する	悪い
通知する内容（項目）について	12	6	0	0
形式（サイズ・ファイル形式・紙質等）について	11	6	1	0

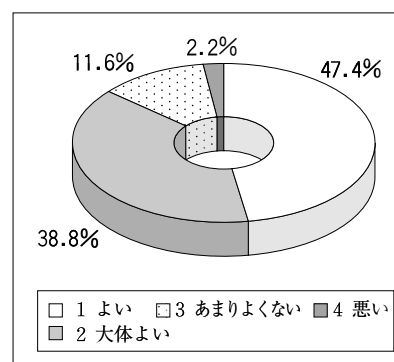
この、保護者と職員の評価から、新しい通知表が、当校が取り組んでいる学力向上に有効であることが分かった。今後は改良を加えながら、継続して活用していくこととした。

## 4 成果と課題

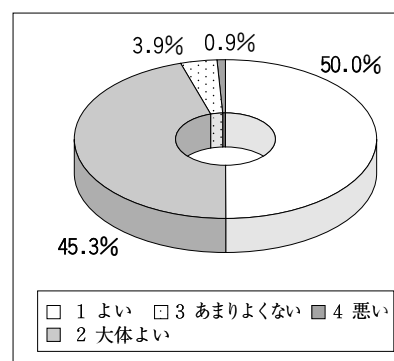
### (1) 成果

本研究の取組の結果、今年度のNRT検査は2，3年生の全教科で前年の同学年の数値を上回り、全国平均を上回った教科も多数見られた。合併後の新潟市の平均（抽出校）との比較でも2年生は5教科中3教科が、市の平均を

グラフ1 通知する内容（項目）



グラフ2 形式（サイズ・ファイル形式・紙質等）



上回り、1教科が同数値であった（3年生は全教科が、ほぼ市の平均と同じ数値であった）。2年生と3年生の偏差値合計は、合併後の新潟市の中で、ちょうど中間であった。

表4 当校の全国標準学力検査の偏差値（17年度 18年度）

学力偏差値（2年生）	国語	社会	数学	理科	英語	学力偏差値（3年生）	国語	社会	数学	理科	英語
17年度	48.4	46.2	45.5	48.0	46.7	17年度	49.4	48.6	48.6	47.3	47.7
18年度	52.4	49.8	51.4	52.9	50.9	18年度	50.3	47.7	47.6	50.1	48.8

また、1月に行われた17年度の全県学力調査では、1、2年生計10教科中、半分の5教科が県の平均を上回った。

表5 当校の全県学力調査の結果（17年度）

正答率（1年生）	国語	社会	数学	理科	英語	正答率（2年生）	国語	社会	数学	理科	英語
自校	82.3	67	76.2	58.4	71.1	自校	73	53.6	77.5	66.0	67.5
県全体	77.6	74.1	71.5	62.1	67.0	県全体	71.1	64.9	75.7	69.3	68.8
自校と県の差	+4.7	-7.1	+4.7	-3.7	+4.1	自校と県の差	+1.9	-11.3	+1.8	-3.3	-1.3

学力の向上とともに、過去に多くの問題を抱えていた現3年生は、朝学習や朝学活等に、静寂の中で集中して取り組む姿が見られている。自信をもち、学校生活にも自ら楽しみを見い出すなど、その姿が変わってきている。



写真4 〈学活の時間に集中して話を聞く3年生〉

（2）本研究と上記成果の因果関係について

本研究1-(2)の生徒、保護者の学校評価に関する意見が、2-(2)-(ア)により、情動的なものであると分かった。具体的な時数等の調査から誤解を解き、むしろ自立性の問題であるという納得を生徒に得させ、教師も不要な「ひるみ」を感じることなく、自信を持った指導を進めたことが、向上につながったのではないかと考察する。また、各教科の3学期の残り時数と指導内容から見た必要時数を勘案したり指導内容の軽重を図ったりしたことが、効果的な指導につながったのではないかと考える。

（3）課題

- ①平成18年度から、当校は2学期制に移行した。授業時数の増加を図り、ゆとりある指導を実現することが目的である。それとともに、生徒の心を大切にし、学習意欲を引き出す教育相談を充実するための時間確保も課題である。
- ②学力向上は家庭学習の充実も不可欠である。夏休み中に個別の保護者会を実施し、保護者への働き掛けを行った。この成果を学力向上につなげる工夫も課題である。学校としても、家庭学習時間の調査を実施する予定である。
- ③18年度は選択教科の在り方も工夫した。生徒の希望に応じる選択の幅を確保すると同時に、3年生には学校選択としての数学と英語を加えるとともに、生徒の考え、判断する力の向上のため、理科の学校選択も取り入れている。
- ④このような実施は、教職員の指導場面や指導時数を増やすなど、負担増となるが、生徒の一層の学力の向上のため、校長にも進言し、努力を続けていく所存である。
- ⑤通知表については概ね生徒、保護者に好評である。通知は、学期制の下、正規の通知表2回、小通知表（学期の中間や定期テスト後に出すもの）2回の計4回である。また、現在のやり方（コンピュータ入力）に変えても、転記の時間を省略できたので、評価に追われて、生徒への指導やふれあいの場面が減ることも避けられている。個人情報や成績の管理に細心の注意を払い、情報にかかわる事故の防止に努めていくことも大切な課題と考えている。

〈引用・参考文献〉

- ・新潟県教育庁義務教育課 『平成18年度学校教育の重点』 2006年
- ・梶田叡一 『意識としての自己 自己意識研究序説』 金子書房、1998年、13～28頁
- ・アニー・コルディエ（著）向井雅明（訳） 『劣等生は存在しない』 状況出版、1999年、41頁
- ・上越教育大学学校教育学部附属小学校内高田教育研究会編 『教育創造』、1997年、第126号、第127号、第128号